

「円乗院本殿修築記念碑」について

整理番号 与野一三	題額 記念碑	題額揮毫 町田寅吉	碑記撰文 —	碑記揮毫 町田寅吉
--------------	-----------	--------------	-----------	--------------

鐫刻 井原赤太郎	撰文建碑年 一九二六・大正一五	住所 本町西	場所 円乗院	備考
-------------	--------------------	-----------	-----------	----

一. はじめに
 本石碑は、円乗院本殿の修築を記念して建てられたもので、円乗院の歴史なども記されている。

○写真1 石碑正面



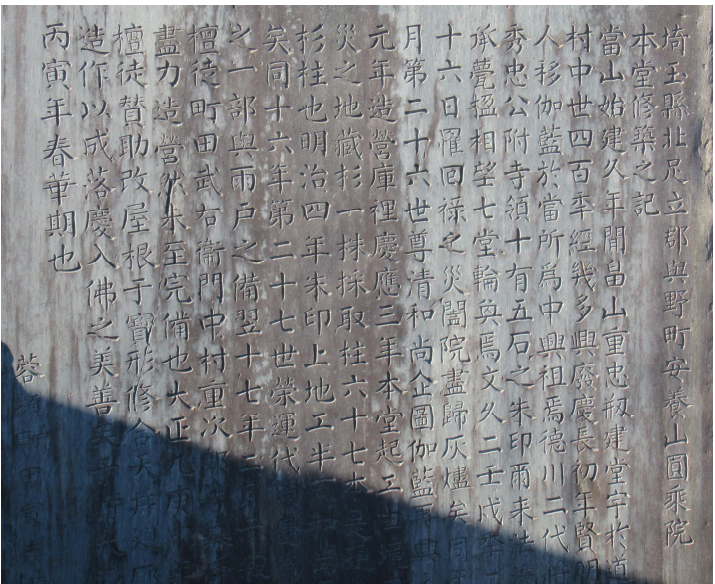
○写真2 題額



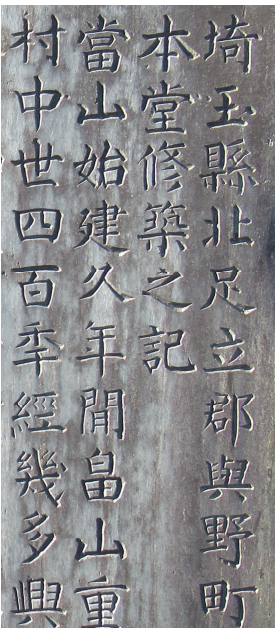
○写真3 石碑背面



○写真4 「碑記」



○写真5 「碑記」部分



二. 翻刻並に訳注

■翻刻

(正面)

◎題額

記念碑

大僧正寂如
時年八十

*寄附者名(略)

(背面)

◎碑記

埼玉縣北足立郡與野町安養山圓乘院

本堂修築之記

當山始建久年間畠山重忠勳建堂宇於道場
村中世四百季經幾多興廢慶長初年賢明上
人移伽藍於當所爲中興祖焉德川二代將軍
秀忠公附寺領十有五石之朱印爾來法流相
承葺楹相望七堂輪奐焉文久二壬戌季二月
十六日罹回祿之災闔院盡歸灰燼矣同年九
月第二十六世尊清和尚企圖伽藍再興元治
元年造營庫裡慶應三年本堂起工由境內被
災之地藏杉一株採取柱六十七本是現本堂
杉柱也明治四年朱印上地工半而和尚遷化
矣同十六年第二十七世榮運代調葺為天井
之一部與雨戸之備翌十七年二月示寂其後

檀徒町田武右衛門中村重次郎等募淨財而盡力造營然未至完備也大正九庚申年秋得檀徒贊助改屋根于寶形修合天井廻廊其他造作以成落慶入佛之美善矣于時大正十五丙寅年春華期也

蓉嶺町田寅吉書

*工事關係者等名(略)

*末尾

鐵心井原赤太郎刻

*異体字等

○於 於。 ○場 場。 ○奂 奂。 ○久 久。 ○季 季。 ○懼 懼。
○回 回。 ○年 年。

■訳注

●本文(いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した)

◎題額

記念碑

大僧正寂如書

時年八十

◎碑記

埼玉縣北足立郡與野町安養山圓乘院本堂修築之記。
當山、始建久年間、畠山重忠初建堂宇於道場村。

中世四百年、經幾多興廢。

慶長初年、賢明上人、移伽藍於當所、爲中興祖焉。

徳川二代將軍秀忠公、附寺領十有五石之朱印。

爾來、法流相承、薨楹相望、七堂輪奐焉。

文久二壬戌季二月十六日、罹回祿之災、闔院盡歸灰燼矣。

同年九月、第二十六世尊清和尚、企圖伽藍再興。

元治元年、造營庫裡。

慶應三年、本堂起工、由境内被災之地藏杉一株、採取柱六十七本。

是現本堂杉柱也。

明治四年、朱印上地、工半而和尚遷化矣。

同十六年、第二十七世榮運、代調薨爲天井之一部、與雨戸之備。

翌十七年二月、示寂。

其後、檀徒町田武右衛門中村重次郎等、募淨財而盡力造營。然未至完備也。

大正九庚申年秋、得檀徒贊助、改屋根于寶形、修合天井。

廻廊其他造作以成、落慶入佛之美善矣。于時大正十五丙寅年、春華期也。
蓉嶺町田寅吉書。

*末尾

鐵心井原赤太郎刻

●訓詁

◎題額

記念碑

大僧正寂如書す。

時に年八十。

◎碑記

埼玉縣北足立郡與野町安養山圓乘院本堂修築の記。

當山は、建久年間、畠山重忠の堂宇を道場村に創建するに始まる。

中世の四百季、幾多の興廢を経る。

慶長初年、賢明上人、伽藍を當所に移す。中興の祖たり。

徳川二代將軍秀忠公、寺領十有五石の朱印を附す。

爾來、法流相ひ承け、薨楹相ひ望み、七堂輪奐たり。

文久二壬戌季、二月十六日、回祿の災に罹り、闔院盡く灰燼に歸せり。

同年九月、第二十六世尊清和尚、伽藍の再興を企圖す。

元治元年、庫裡を造營す。

慶應三年、本堂起工す。境内の被災の地藏杉一株より、柱六十七本を採取す。

是れ現本堂の杉柱なり。

明治四年、朱印上地、工半ばにして和尚遷化せり。

同十六年、第二十七世榮運、代りて薨を調へ、天井の一部と雨戸の備へとをなす。

翌十七年二月、示寂せり。

其の後、檀徒町田武右衛門中村重次郎等、淨財を募りて力を造營に盡くす。然れども未だ完備に至らざるなり。

大正九庚申年秋、檀徒の贊助を得て、屋根を實形に改め、天井を修合す。

廻廊其の他の造作以つて成る。落慶入佛の美善たるかな。時に大正十五丙寅の年、春華の期なり。

蓉嶺町田寅吉書す。

鐵心井原赤太郎刻す。

●人物

○大僧正寂如 不詳。

○畠山重忠 長寛二(一一六四)年から元久二(一二〇五)年。武藏国畠山郷(今の深谷市畠山)を領し、源頼朝拳兵時は敵対したが、のちに臣従。各地を転戦して戦果をあげ、鎌倉幕府創業の功臣のひとりであった。頼朝の没後、執権の北条氏と対立し、討たれて一

族共々滅亡した。武勇の誉れ高く、その清廉潔白人柄で「坂東武士の鑑」と称された。埼玉県にゆかりが深いことから、各地に重忠がらみの伝説が残されている。

○賢明上人、尊清和尚、榮運和尚 円乗院の住持。

○徳川秀忠 天正七（一五七九）年から寛永九（一六三二）年。家康の三男で、徳川に大將軍。幼名長丸。豊臣秀吉の諱を得て、秀忠と名乗る。慶長十（一六〇五）年、家康から將軍位を継承し、徳川將軍体制が確立した。家康の死去まで、駿府江戸二元政治の一翼を担う。元和九（一六二三）年、將軍位を家光に譲るが、大御所として実権を握っていた。幕府の基礎固めに貢献した。

○町田武右衛門、中村重次郎 不詳。

○町田寅吉 号が蓉嶺。ウェブサイト「デジタル版『渋沢栄一伝記資料』（渋沢栄一記念財団）」によれば、大正十（一九二二）年に渋沢が題額を揮毫した「吉岡翁寿碑」が建てられたが、碑文は「埼玉県屬町田寅吉書」とある。埼玉県庁職員で、能書家として県に關係する碑文や公文書を書くことを仕事としていたらしい。

○鐵心井原赤太郎 鉄心は号。与野の石工。『埼玉県営業便覧』（一九〇二）「與野町」の「上町」西側（長伝寺のはす向かい）に「石工井原赤太郎」が見える。彼の作品は、与野鈴谷天神社の「凱旋記念碑」（一九〇六）や円乗院の「本間金藏之墓」（一九一九）などがある。

●注

○建久年間 西暦一一九〇年から一一九九年。

○朔 創に通じる。始める。

○道場村 今のさいたま市桜区大字道場を中心とした地域。

○中世 日本では鎌倉室町時代（鎌倉幕府開府一一九二年から江戸幕府開府一六〇三年）。

○季 年。

○慶長初年 西暦一五九六年。

○朱印 朱印状。大名や將軍が発行した公文書で朱印が捺されていた。秀忠からの朱印状は残っていないが、それいご將軍から下賜された朱印状が円乗院に残されている（丹治）。

○法流 正しい法が相続して絶えないことを水流に例える。

○葺楹 葺は、瓦葺きの屋根。楹は、母屋の正面にある柱。建築物を象徴する。

○七堂 寺院に配置されている七つの堂宇。仏殿、方丈など。

○輪奐 建物が壮麗なさま。

○文久二壬戌季 西暦一八六二年。

○回祿 伝説上の火の神。転じて火災。

○闔 こぞって。

○企圖 現代語で企てる。

○元治元年 西暦一八六四年。

○庫裡 七堂のひとつで寺院の台所。住職や家族が生活をするところ。

○慶應三年 西暦一八六七年。

○明治四年 西暦一八七一年。

○朱印上地 朱印状で安堵されていた土地。円乗院の境内を指す。

○遷化 高僧の死去を言う。

- 同十六年 西暦一八八三年。
- 代 尊清和尚に代わって。
- 調 日本語用法で、必要なものを揃える。
- 翌十七年 西暦一八八九年。
- 示寂 入寂とも。仏や高僧の死去を言う。
- 造作 日本語の用法で、家を作ること。
- 落慶 落慶供養。新築または修築した仏寺の工事が完成した時に行う、喜びの法要。
- 入佛 入仏供養。仏像を寺院に迎えて安置するために営む法要。堂宇の修繕のため、一時的に他に移した仏像を復する遷座も称する。
- 善美 善は、めでたい。美は、立派である。
- 大正十五 西暦一九二六年。
- 春華期 春の花が咲く時期。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

◎題額

記念碑

大僧正寂如が書した。
時に年八十。

◎碑記

【碑題】

埼玉縣北足立郡與野町安養山圓乘院本堂修築の記。

【創建】

当山は、建久年間、畠山重忠が堂宇を道場村に創建したのが始まりである。

【中世】

中世の四百年間は、いくたびもの興廢を繰り返した。

【賢明上人による中興】

慶長初年、賢明上人が、伽藍を当所の与野に移した。彼が中興の祖である。

【徳川將軍からの朱印状下賜と繁栄】

徳川二代將軍秀忠公より、寺領十有五石の朱印状を付与された。

それより以来、ここ円乘院では、仏法が正しく継承され、建物が向かい合うように立ち、七堂伽藍が壮麗に聳えていた。

【火災による被害】

ところが、文久二年壬戌の歳の二月十六日、火災に見舞われて、すべての建物が焼け落ちて、消滅してしまった。

【尊清和尚の復興への取り組み】

火災から数ヶ月後の同年九月には、早くも第二十六世尊清和尚が、伽藍再興を企てた。二年後の元治元年、先ず庫裡を造営した。これで住職一家の拠点ができた。

その三年後の慶応三年、本堂再建の工事を始めた。境内にあつて被災していた地藏杉一株から、六十七本の柱を採取した。これが現在の本堂の杉柱である。

その更に四年後の明治四年、境内の伽藍再建工事半ばにして、尊清和尚は遷化された。

【栄運和尚の復興への取り組み】

第二十七世栄運和尚が住持を継承し、継承後十二年の明治十六年に、尊清和尚に代わって甍を調達し、天井の一部を修復し、さらに雨戸の備えをしつらえた。

しかし栄運和尚も、その翌年の同十七年二月に、示寂された。

【さらなる復興への取り組み】

その後、檀徒である町田武右衛門や中村重次郎等が、寄附を募って造営に力を尽くした。しかしまだ完全に復活するには至らなかった。

【円乗院の大宝塔の復活】

大正九年庚申の歳秋、檀徒の賛助を得て、屋根を宝形に改め、天井を修合した。

【完成と落慶入仏法要】

やがて廻廊その他もそろい、円乗院の伽藍はすべて完成した。

举行された落慶法要と入仏法要は、まことにめでたく、立派なものである。

それは大正十五年丙寅の歳、春の盛りの時であった。

【記事】

蓉嶺町田寅吉が書した。

鐵心井原赤太郎が刻した。

三．資料

(一) 「新編武蔵風土記稿」(文政十三(一八三〇)年) 卷一五五 足立郡之二一與野領

◎與野町・寺院

○圓乗院

「新義真言宗、京都仁和寺末、安養山西念寺と號す、寺領十五石の御朱印は慶長一九年に附せらる、當寺は畠山重忠の草創にして、古は近郷道場村にありしが、何の頃にや當所に移せりと云、彼道場の村名も當院にありしより起こりしなど、語り傳へり、重忠のことは道場村金剛寺の條に出たれば併せ見るべし、本尊不動を安ず、中興の僧を賢明と云、元和五年十月十二日示寂せり」

*鐘樓

「鐘銘に重忠の草創せしことをほぼ記したれど、證とすべきことなければ略せり」

↓この梵鐘は昭和十七年に戦争のために供出。今の梵鐘は、同三十四年の鑄造。

◎道場村

「道場村は上峯郷水判土庄と唱ふ、村名の起りを尋ぬるに建久年中とかや、畠山重忠當所の土中より觀音の像を得たり、依て一字の道場を營み彼像を安ぜりしより、村の名にも呼しと云、彼道場は今與野町なる圓乗院にて、後年移轉せしとも又村内の金剛院なりともいへど、皆據とすべきことなし」

..寺院

○金剛寺

「新義真言宗、與野町圓乗院の末、安養山と號す、本尊正觀音惠心の作なる同體の小像を腹籠とせり、相傳昔當所に大伽藍ありしに、保元の亂に兵火の爲に烏有せり、其後建久年中畠山次郎重忠當所を領せしとき、土中より此像を得たり、是古大伽藍なりし時本尊なら

んとて守護佛となし、當寺を草創して安ぜりと、中興開山は賢明と云此僧本寺圓乘院をも中興して、元和五年十月十三日彼院に於て示寂なせり」

(二)「武蔵国郡村誌」(明治十五(一八八二)年)卷之十

◎與野町・仏寺

○圓乘院

「縦九十七間横四十一間面積千四百五十七坪町の南方にあり新義真言宗仁和寺の末なり(以下「風土記稿」)」

◎道場村・仏寺

○金剛寺

「竪三十七間横廿間面積六百八十七坪村の東方にあり新義真言宗本郡與野町圓乘院の末なり(以下「風土記稿」)」

四. 主な参考資料

① 翻刻

・『与野市史 近代資料篇』(昭和五六(一九八一)年)。

② 論文など

・丹治健蔵『円乘院《与野》(さきたま文庫十六)』さきたま出版会、一九九〇年

*碑文翻読にあたり、大東文化大学の権田瞬一氏にご協力いただいた。

以上

二〇二五年二月 薄井俊二訳す